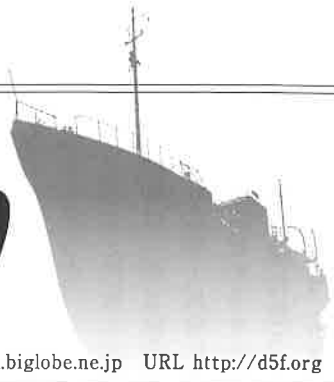


2016.09.01  
No.395  
(9・10月号)

# 福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



カザフスタン共和国につながるのがある民間外交団体スタッフや国際関係研究者、ジャーナリストなどが集ったオープニングセレモニー



## 核なき未来への願いつなぐ

八月二九日は国連の「核実験に反対する国際デー」です。旧ソ連・セミパラチンスク核実験場が閉鎖された日―一九四九年に最初の核実験が行われた日でもある―に因んで定められました。

実験場閉鎖から二五年の節目に、展示館ではセミパラチンスク核実験場写真展を開催しています。二一日に行われたオープニングセレモニーには、カザフスタン共和国駐日大使をはじめ、展示館やカザフスタンに縁のある人びとが

つどいました(詳細2めん)。

八月初旬には恒例の広島・長崎の被爆の実相を示す写真や原爆ドームの模型などを組み合わせたミニ企画展示も行いました。五月のオバマ大統領の広島訪問の記憶もまだ鮮やかな夏休みとあつて、広島・長崎での平和祈念式典をテレビで見ましたという小学生が熱心にメモを取る姿が印象的です。レポートにまとめたいという高校生、大学生も

多く、スタッフに熱心な質問が続きました。

また吹奏楽曲「ラッキー・ドラゴン」第五福竜丸の記憶」を演奏する中高生たちの来館も相次いでいます。曲に描かれる第五福竜丸の物語に触れ、最終楽章の「希望」の意味を模索している方が多いように感じられます。演奏を通じてより一層核なき世界を考えるようになりました。とのたのしいメッセージも届いています。

第五福竜丸のパネル展を開催する夏の取り組みも各地で行われ、学芸員が講演へ赴くなどしています(5めん)。開館四〇年記念で製作した「核実験年表」も青年団が一〇〇部購入するなど活用されています。

夏の締めくくりに、牛乳パックで作る第五福竜丸工作教室も開催されました(8めん)。それぞれの船の航跡に、核なき未来をあらためて強く願います。

# 核実験に反対する国際デー セミパラチンスク写真展

「旧ソ連・セミパラチンスク核実験場写真展」が始まりました。八月二十九日は同実験場が閉鎖されて二五周年の節目にあたります。また二〇〇九年にはこの日が国連の「核実験に反対する国際デー」と定められました。このことを示す新しい常設パネルを核実験年表コーナーに設置し、解説パネルとカザフスタン大使館から提供された写真一七点を展示しています。

八月二二日のオープニングセレモニーには、在日カザフスタン共和国大使館のバウダルベック・イエルラン特命全権大使が出席し、八〇名の参加者に新しいパネルのお披露目をしました。

主催者を代表し山本義彦協会理事は「第五福竜丸の事件により広島・長崎に次いで三度目に目覚めさせられた日本人は原水爆の恐ろしさを知り、その製造、実験、使用禁

止の運動を続けてきました。非核三原則が国家の基本的原則となつて半世紀です」と挨拶し、第五福竜丸が平和を願う市民の声により大切に保存され、それを受け止めた東京都により展示館が建設され、今年四〇年を迎えたことを紹介しました。そして核なき世界をめざしてカザフスタンの



新しいパネルのお披露目をするバウダルベック大使(右)と山本理事

ヒバクシャとの連帯を呼びかけました。

## 八月の悲しみ

バウダルベック大使は、広島・長崎の平和祈念式典に列席した印象を述べ、四年後の同じ八月にカザフスタンのステップ地帯―セミパラチンスク実験場がソ連の第一回目の核実験に揺るがされた、と原爆被害に思いを重ねました。

セミパラチンスクでは四〇年にわたり広島型原爆二五〇〇発に相当する五〇〇回もの核実験が行われ、一五〇万人のカザフスタンの人びとが生活を破壊され、広大な地域が汚染されましたが、放射能の影響について全く知らざられておらず、実験場周辺の人びとはキノコ雲を見るためにわざわざ屋外に出て見物したといえます。

## 八月二十九日の決意

一九九一年八月二十九日、ヌルスルタン・ナザルバエフ大統領により、セミパラチンスク核実験場は閉鎖されました。カザフスタン共和国はこれで核保有数世界四位である

ことを放棄したのです。

実験場閉鎖一五年にはセミパラチンスク市において中央アジア非核地帯条約が締結されたこと、二五周年を迎える今年には首都アスタナで「核兵器のない世界の実現」をテーマにした国際会議が開催され、日本からも参加があること、二〇〇九年一月国連総会が八月二十九日を「核実験に反対する国際デー」と宣言したことが紹介されました。

核軍縮と核不拡散はカザフスタンの外交政策の優先事項となっており、来年から国連安全保障理事国としても取り組んでいく、人類が非核世界のために私たちが共には共に、粘り強く団結していきましょう、と流ちょうな日本語でスピーチを締めくくりました。

## 連帯の努力を

オープニングセレモニーには東京都建設局東部公園緑地事務所・細岡晃所長をはじめ、外務省軍縮不拡散・科学部の川崎方啓大使、松井啓・初代カザフスタン日本大使、安細和彦・前マーシャル日本大使、

賛助会員の皆さんが参加しました。

川口順子元外務大臣・環境大臣は、参議院議員時代にセミパラチンスク核実験場を視察したことがあり、実験により破壊され、声をあげることすらできない被害がある現実を突き付けられたと語り、廃墟と化した家屋や実験施設、核爆発でできた湖＝原子湖の様子を伝えました。

第五福竜丸の被災時には中学生で、事件を鮮明に記憶しており、その船が保存されている展示館は非常に重要であり、四〇年にわたって維持さ(3めんにつづく)



川口順子元外相

れてきた関係者の努力をねぎらいました。

第五福竜丸や当時近辺で操業していた多くの漁船と広島・長崎の被爆者、マーシャルやセミパラチンスクの人たちが連帯を意識していくのはとても大事なことで、この写真展を機に世界中のヒバクシャが連携していくことで、自分たちの子や孫が安全と平和を享受していけるよう、連帯連携の努力を続けていきましよう」と挨拶しました。

### 核なき世界への道筋を

日本原水爆被害者団体協議会の田中照巳事務局長は、首都東京に広島・長崎の被爆の実相を伝える資料館を被爆者は切望しており、その見地からも第五福竜丸展示館は重要な施設であり、ここでソ連の核実験被害が紹介されることは非常に意義深いと指摘しました。

原爆被爆者は占領下のプレスコードによる規制で自分たちの苦しみを訴えることができず、制限の解除後も省みられることなく苦し

みを深めているさなかに、第五福竜丸をはじめとする日本の漁船がアメリカの核実験で被災し、核兵器による影響が

いかに恐ろしいものであるかを国民が知るところとなり沈黙を強いられてきた被爆者たちも、原水爆禁止の声に押し立てられて世界に訴えることができようになつた、そして運動の中で、世界中に核兵器をつくるあらゆる過程の中でヒバクシャが生み出されてしまうことを学び、世界の核被害者と連帯して、核兵器をなくしていかななくてはと、さまざま努力を重ねてきたことを説明しました。

オバマ米大統領でさえ「自分が生きている間に、核なき世界の実現は難しい」と言うなか、高齢化した被爆者たちはそうした世界を見ることはできないかもしれない。しかし少なくとも、核兵器がなくするための確かな道筋だけは確認していききたい、現在被団協が取りこんでいる「ヒロシマ・ナガサキの被爆者が訴える核兵器廃絶署名（ヒバクシヤ国際署名）」を広げていきたいと訴えました。

## 展示パネルの紹介

第五福竜丸展示館では、世界のヒバクシャ（常設展）、死の灰の世界的広がりやさまざまな核被害を解説した「核の時代」パネルなどでビキニ事件以外の核被害についても展示をしています。旧ソ連の核開発・核実験がもたらした影響に特化した展示はありませんでした。

本企画展ではカザフスタン大使館より提供された写真パネル一七点と、豊崎博光さんが一九九一年に取材した反核市民行動「ネバダIIセミパラチンスク運動」の写真と、解説パネル二点、さらに現在のカザフスタンの写真も特別展示しています。

中央アジアに位置するカザフスタン共和国は、国土面積



一九四九年八月 旧ソ連初の原爆実験

### 核実験施設解体作業



に多くの核関連施設、実験場がありました。セミパラチンスク（カザフ語ではセメイ。本企画展ではセミパラチンスクと表記）核実験場は、日本の四国に匹敵する面積を占めて、一九四九年から六二年にかけて四五回に及ぶ核実験が行われました（回数はIAEA報告書に基づく）。

八〇年代半ばから核実験場の閉鎖を求める取り組みが、アメリカ、ソ連、カザフスタンの共同による「ネバダIIセミパラチンスク運動」として進められました。

核実験による被害者は約一五〇万人と推定されていますが、「風下」地域の被害等実態は明らかではありません。カザフスタン政府は「セミパラチンスク核実験場の核実験被害者たち市民の社会的保護に関するカザフスタン共和国の法律」により、放射能汚染地域の居住者だけでなく、この地域で働いたり軍務についていた者も対象として補償を実施しています。

旧ソ連・セミパラチンスク核実験場写真展は一〇月三日まで。

## 詩画人・四國五郎 と「辻詩」

四國 光



父・四國五郎は第五福竜丸の水彩画を残している。また、ビキニ事件の時は、巨大な「原爆マグロ」を作って広島デモに参加した。行動しなければ、という思いが常に父を突き動かしていた。

その父の展覧会が「原爆の図・丸木美術館」で、開催されている（九月二十四日迄）。

況下で作られた、逮捕覚悟の反戦活動であった。「辻詩」が出来る上になると、峠が始めた詩のサークルである「われらの詩の会」のメンバー

が手分けしてゲリラのように街中に貼り出し、警察が来ると大急ぎで剝して逃げた。「辻詩」の四隅に残る画鋏の穴を数えると、何回逃げたかがわかる。多いもので四〇個の穴が開いていたそうだ。

どのようにして「辻詩」を作ったか、父のメモが残されている。それを読むと、ジャズの即興を連想させる。峠と父とでアイデアを持ち寄る。お互いに意見をぶつけ合いその場で「辻詩」の原案をどんどん作っていく。父がそれを自宅に持ち帰り、絵と、絵に相応しい字体で詩を書き入れる。出来上がると街に貼り出し道行く人に訴える。混沌の現実から今もぎ取ってきたような「生の表現」。それこそが人の心に訴え人を動かす、という信念が父たちにはあった。父は自分たちで書くだけでなく、多くの方が参加可能な「表現のプラットフォーム」として、「辻詩」に大きな可能性を見出していた。沈黙から言葉を引き出そうとした。

仲間たちの中には、父や峠の、あまりに前のめりな姿勢に対して、危険すぎるので止

めるべきだ、という反対も多かったと言う。しかし、父の日記を読む限り、この運動を減速したり止めたりする気持ちは微塵もなかったようだ。「辻詩」によって、詩と絵が社会に対してどれだけ働きかけができるのか、そのチャレンジに全身全霊をかけて没頭していた様子が伺われる。「この時代、沈黙してはいけない」。日記を読むと、一連の表現活動による逮捕の可能性も仄めかしており、恐らく覚悟の上だったようだ。「戦争とシベリアを経験したもので、それに比べればどんな事でも乗り越えられると思っただ」と晩年語っていた。

「辻詩」とは廃棄あるいは押収される事が運命づけられた「使い捨て」の表現物だ。自分が丹精込めた「表現」の痕跡は一切残らない。名前が残らないという事は、芸術の本質である自己表現でしかない。三年近く、父は「辻詩」の作成に情熱を注いだ。作品として残る可能性の無いものに対して、そこまでのエネルギーを費やし続けることの、執念のような腹の括り方に、

私は改めて驚きを禁じ得ない。

この夏「ヒロシマを伝える―詩画人四國五郎と原爆の表現者たち」(WAVE出版)を出された永田浩三さん(元NHKプロデューサー)にこの話をした際、こう言われた言葉が印象的だった。「無名性という事でしようか。名前を残す事よりも、人の記憶に残ることを目的とする。報道やドキュメンタリーに近い考え方だと思えますよ。」作品を「残す」ことよりも、「伝える」ための芸術。伝えて「記憶に残す」ための表現。そこでは作者は無名となる。無名の表現によって、人びとの価値観と行動を変えたい、という思いが父たちの背中を強く押ししていた。

峠の死後も、父は生涯、戦争と平和のメッセージを伝える事を自分の使命と課し、絵や詩など膨大な作品を残した。その中で、最も父の心を熱く燃やしたものが、若き日の「辻詩」であったと思う。「辻詩」は表現者・四國五郎の原点であった。(しこく ひかる／四國五郎長男)

## 71年目の長崎の夏より

安田 和也

八月九日の「原爆の日」に

長崎の活水中学・高等学校で  
おこなわれる平和集会で講演  
する機会を得た。ミッシェン  
系の女子校のチャペルに全校  
生徒六〇〇名が集う。賛美歌  
が流れておごそかに始まる。  
「71年目のナガサキへ、福竜  
丸からのメッセージ」と題し  
て一時間一五分のお話。その  
あと各学年の代表から平和へ  
の意見表明があり、屋外の芝  
生広場に移動した。

原爆に向き合う生徒たち  
一一時二分、生徒により黙



芝生広場で平和宣言／写真は同校  
提供

とうが告げられ同時に市の広

報からのサイレン音が響い  
た。生徒たちが瞑目して頭を  
下げる姿を遠目に、見上げる  
と青い高い空に白雲が大きな  
目玉のような造形となってい  
た。あの日はもう少し雲にお  
おわれていただろう、そのわ  
ずかな切れ目から見えた地上  
にむけてファットマンが投下  
された、と一瞬眼前が真っ白  
になって、「ピカは人が落と  
さにおちてこん」と耳元に  
響いたような錯覚にとらわれ  
て目をとじた。

丸木スマさんの言い放った  
一言のなんと大きなことだろ  
う。閃光と大爆音が、もたら  
された破壊の図が浮かぶ。平  
和祈念式典で被爆者代表の井  
原東洋一さんは、「ウラン原  
爆とプルトニウム原爆の二つ  
の使用による実験ではなかつ  
たか」と告発したことをニュ  
ースで知った。

生徒たちによる平和宣言  
は、「核兵器が物も心も体も

破壊し尽す最大の暴力」「日  
本の周辺の緊張が高まってい  
ても：武力・暴力によらない  
解決を放棄するのは許されな  
いこと」「被爆者の想いを受  
け継ぎ、平和を創る活動を続  
けていく」と力強い。

ピースミュージアムにて  
今回、ナガサキ・ピースミ  
ュージアムでは、七月二〇日  
から八月八日まで「福竜丸と  
マーシャルの人びと」のパネ  
ル展を開いてくださった。七  
日の夕刻、毎年この時期に受  
け入れている福島・南相馬の  
小学生たち二〇名ほどに、ピ  
キニ事件とマーシャルの人び  
との苦難についてフォト・ジ  
ヤーナリスト豊崎博光さん構  
成のパネル、島田興生さん撮  
影の「マーシャルのこどもた  
ち」の写真を示し五〇分ほど  
お話した。

同館専務理事の増川雅一さ  
んは長崎放送の出身で、親し  
い同僚だったと前田哲男さん  
のお名前がでる。前田さんは、  
島田さんとともに一九七四年  
に初のマーシャル取材で一カ  
月滞在している。前田さんの  
『棄民の群島』（時事通信一九  
七九）、島田さんの写真集『ピ

キニーマーシャル人被爆者の  
証言』（JPU出版一九七七）  
の二冊の本から受けた衝撃は  
忘れがたい。

被爆者の言葉にふれる

八日の昼下がり、平和公園  
の祈念像に近い長崎原爆被災  
者協議会を訪ねた。同会の相  
談員を四〇年余されている横  
山照子さんにお会いし、昨年  
上梓した被爆者の証言・手記  
集『ノーマア・ヒバクシャ』  
被爆70年私たちの「継承・警  
鐘」を求めたかったからだ。

横山さんを知ったのは一九  
七七年のNGO被爆問題国際  
シンポジウムの頃だ。同シン  
ポは、自然科学・社会学・医  
学などの専門家、平和運動家  
など幅広い個人・団体など内  
外からの参加を得て、原爆被  
害を新たな知見をふまえつつ  
解明するとともに、被爆者の  
戦後その社会的状況を全国か  
ら寄せられた調査記録を基に  
究明し大きな成果を生み出し  
た。シンポジウム宣言は、「人  
類みなヒバクシャ」といい、  
ここから「ヒバクシャ」は国  
際語となった。この年、世界  
大会は一四年ぶりに統一して  
開かれている。

長崎でのシンポへの取り組  
みは大部の『長崎レポート』  
にまとめられた。横山さんは  
調査員としてかわられてい  
るが、親しくなったのは被爆  
者援護法の制定や松谷英子さ  
んの原爆裁判のたたかいで被  
爆者の方がたのお世話をしな  
がら上京しお会いするようにな  
ってからだ。

今回の訪問で入手した本に  
は横山さんの手記も収められ  
ている。被爆時は四歳、島原  
に疎開して直爆は免れたが、  
数日後に長崎市内に戻った。  
父と妹は重症を負い、祖父母  
も母も姉も原爆に苦しめられ  
たと綴る。原爆と向き合う  
のは暗く悲しく寂しいからい  
やだ」という横山さんを支え  
たのは被爆詩人の福田須磨子  
さんの毅然とした生き方であ  
り、あの日亡くなった人々  
を無駄死にさせないために  
「九条」がある」との思いだ  
という。戦争も核兵器もな  
い世界をつくるために「憲法  
九条」の一言一句一歩も私は  
譲れません」との言葉が重く  
響く。（やすだ かずや／第  
五福竜丸展示館主任学芸員）

連載⑧

晴れた日に  
雨の日に

山村茂雄



私が重森さんと知り合うのは、一九五九年広島で開かれた「第五回世界大会記念美術展」の企画を通して

第五福竜丸展示館開館四〇周年記念誌に平和協会代表理事川崎昭一郎さんが、展示館開館時の準備状況を広田重道さんの著書『第五福竜丸保存運動史』を引いて紹介しています。以下引用の一部です。

「仕事のほとんどは広田専務理事、鹿田敏彦事務局長、嶋田徹之助老人など数名の者の肩にかかっていたのだから、

ら、『無我夢中』の言葉がびつたりだった。それを何とか切り分けられたのは、地元の東京建設従業員組合の三井周二、田中浩、その他の方の協力と、山村茂雄、森下一徹などの方々の援助のおかげだった。

唐突に名が揚げられている私と森下一徹。今回はその記述に沿い、森下一徹君の第五福竜丸保存運動とのかかわりをたどります。

\*

森下一徹君が、私と仕事をすることになるのは一九六四年でした。当時、森下君は横浜・日吉の東京総合写真専門学校の手をされていました。紹介してくれたのは、学校創立者で校長をしていた写真評論家の重森弘淹さんでした。

森下君は二五歳。

のことでした。引き続き英文写真集『Hiroshima-nagasaki-document1961』の企画・編集への参加などで交流を深め、原水禁運動や世界大会の写真記録の保存などの助言を受けたりもしていました。

日本原水協は毎年、世界大会の「記録集」を作成してました。その編集スタッフに森下君が推薦されたのです。

一九六四年の第一〇回世界大会は東京・京都・大阪・広島・長崎と移動して開かれました。この広島取材の中で森下君は、はじめて「被爆者」に出会うことになり、以後、毎年の大会期間だけでなく広島・長崎を訪ね被爆者を撮り続けることになりました。その仕事は一九七八年写真集『被爆者』として結実します。写真集は以後、版元を変え出版を重ねました。八一年のソ連六〇周年記念国際記録芸術写真コンテスト「人間と平和」でグランプリを受賞したことに加えおきましよう。

一九六四年以降、森下君は日本原水協の諸運動、関連する平和運動の取材活動を続けることになりました。被爆者運

動を記録したいくつもの代表的作品をのこしています。

\*

一九六八年四月、第五福竜丸放置が知らされた時、森下君はいち早く「夢の島」に向かいます。その年撮影した写真が「沈めてよいか第五福竜丸」と呼びかけた武藤宏一さんの投書（朝日『声』欄三月一〇日）に合わせ、展示館入口すぐに展示されています。（左上写真）

写真には、傾く船の手前に散乱するゴミの中に読みとれる「オリンピック」の文字が撮り込まれています。

「表現とは作者の批評行為でありそれなくして表現は存在しない」。重森さんはこう語りましたが、この写真にはビキニ事件への回帰を促すと同時に、写真を読むうえで必要な時代批評が込められています。

森下君の写真取材は第五福竜丸保存運動の進展にともなうて重ねられます。ふりかえれば、第五福竜丸保存運動の当初の記録写真の主なもの、その多くは森下君の作品と言つていいと思います。

\*

冒頭引用の中で、広田さんには実務上の理由もありました。一九七六年六月一〇日の展示館開館に先だつ五月二九日「久保山愛吉記念碑」除幕式、五月三十一日「ビキニ水爆被災資料集」出版記念会、そして六月五日「都立第五福竜丸展示館完成祝賀会」、この三つの行事が連続したのです。

五日の「完成祝賀会」は展示館開館日に合わせる案もあったと記憶していますが「祝賀会」は予定通り江東区公会堂で開かれました。「祝賀会」は地元江東区で開く、広田さん特別の思い、船を台風や水没から守ってくれた江東の労働者や地元市民へ感謝の意味があったのだと思います。

行事に大わらわな広田さんと鹿田君、私も森下君も引き込まれるように夢の島に通いました。森下君は展示パネルの作成にも携わりました。

当時、第五福竜丸・夢の島最寄り駅は東西線の東陽町、行きはタクシーにしても帰りは歩き。森下君と二人、夢の

（つめんにつづく）

## 元船舶無線通信士、

## 岸本勇夫さんに聞く

展示館二階に船舶無線に使用されていた電鍵がありま  
す。直接触れて音をだす。体  
験型（ハンズオン）の展示  
で、子どもたちにも大人気で  
す。小学生が集まって代わる  
代わる電鍵を叩くと、蚊の鳴  
くような細かい音や主張するよ  
うな乱暴な音など音が館内に  
響きます。

今では衛星通信が発達し、  
モールス信号で交信が行われ  
ることはなくなりました。通  
信士の仕事も、専任ではなく  
航海士などが兼任することが  
多くなっています。そのため  
モールス信号も子どもたちに  
は馴染みがなく、解説パネル  
を読んでも何のことなのかわ



船員の誇りを語る岸本さん・90歳

からない子どもも少なくありませ  
ん。ところがモールス信号が  
登場するアニメ映画の一場面  
などを教えると、途端に納得  
したように音に興味を込めて  
電鍵を叩きだします。

## 無線通信士の仕事

この展示を寄贈してくださ  
ったのは岸本勇夫さんはじめ  
無線通信士組合の皆さん。今  
回、岸本さんを訪ね、船舶無  
線通信士の仕事について聞き  
ました。

終戦直後、岸本さんは一九  
歳で船員になってから引退す  
るまでのおよそ四〇年間、商  
船、漁船、通信士組合の役員  
など無線通信の仕事に携わり  
続けてきました。

無線通信士は、気圧、風  
力、風向といった気象情報や  
船の動静をモールス信号で無  
線局に伝え、陸と船を繋げま  
す。また通信社から無線で送  
られてくるニュースを受け取  
り、陸の情報を船員に伝える

のも通信士の役目でした。さ  
まざまな情報が飛び交い混線  
することも多いなか、必要な  
情報を聞き取るためには経験  
と熟練した技能が必要とされ  
ます。

通信士の仕事のみならず、  
商船では積荷の積み降ろし、  
漁船では漁や水揚げ作業など  
肉体労働をします。マグロ漁  
船で寄港したアフリカの港で  
は、水揚げ作業を現地労働者  
が行います。しかし作業に時  
間がかかりすぎ、次の漁に出  
ることができないため賃金分  
のお金を支払い自分たちで作  
業を代わるということもあつ  
たそうです。

## 船の命綱

無線通信士は航海の安全を  
守る命綱のような存在です。  
陸から離れた海の上では船の  
所在や状況を陸や他の船舶に  
伝える無線通信士は欠かさこ  
とができません。

海難事故発生時の救難信号  
の送受信も無線通信士の仕事  
です。救難信号が他の通信に  
障害されることを防ぐため、  
毎時一分と四分にはそれ  
ぞれ三分間の「沈黙時間」が

定められ、すべての通信が中  
断されました。ひとたび救難  
信号を受信すると、近くの海  
域にいる船は直ちに救助に駆  
けつけることが船員に定めら  
れた義務の一つでした。現在  
のように航空機による救援が  
発達していない時代、無線通  
信士は人命救助のための重要  
な役割も担っていました。

## 船員の受けてきた犠牲

航海の安全は海難事故だけ  
でなく、戦争や核実験によつ  
て度々脅かされてきました。  
第二次大戦や朝鮮戦争では、  
多くの船員が徴用され石炭な  
どの物資輸送に従事し、犠牲  
となりました。

アメリカが核実験のための  
危険区域を公海上に設定する  
と、安全が脅かされると船員  
たちは一同に反対の声を上げ  
ました。しかし実験は実施さ  
れ、多くの船員が被害を受け  
る結果になりました。それに  
対し、岸本さんら無線通信士  
も、海の平和のため第五福竜  
丸の被災や核実験の間からの  
安全確保のため取り組んでき  
ました。第五福竜丸の保存運  
動が始まると、平和協会の広

島大橋を渡り、東陽町経由、  
門前仲町に足をのびし下町が  
香る店に立ち寄りませす。深川  
不動参道で「其角せんべい」  
や、店頭の大鍋で煮る海苔の  
佃煮をよく買いました。

\*

展示館開館四〇周年記念レ  
セプションに森下君は車椅子  
で出席しました。二〇〇二年  
森下君が提唱し、六人の写真  
家、森下一徹・伊藤孝司・桐  
生広人・豊崎博光・本橋成一・  
森住卓各氏作品による写真展  
「世界ヒバクシャ展」を引き  
継ぎ、海外展開に力を注ぐ息  
女の森下美歩さん、森下君の  
永い闘病を支える家族が同行  
していました。

(やまむら しげお／第五福  
竜丸平和協会顧問)

田重道専務理事を招いて学習  
会を行うなど積極的な活動を  
行いました。

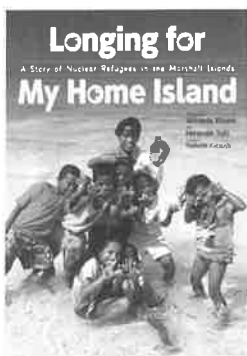
今日、無線通信をめぐる環  
境は大きく変わりましたが、  
福竜丸の保存や今日の展示館  
の運営についても元船員とし  
て協力していきたいと語って  
おられました。

**牛乳パックで作る第五福竜丸  
夏休み親子企画**

恒例となった工作教室で今年も「自分だけの第五福竜丸」を作りました。牛乳パックを船体とスクリューに仕立て、輪ゴムを動力にする船です。最初に安田和也主任学芸員からマグロと延縄漁の話、第五福竜丸の被ばくについての解説を受け、それぞれオリジナリティあふれる装飾の船を完成させました。台風の切れ間の晴天で、庭のビニールプールでの進水式では歓声が上がりました。



**『ふるさとかえりたい』  
英語版ができました**



福竜丸だより5月号でビキニふくしまプロジェクトの武本匡弘さんから紹介された写真絵本『ふるさとかえりたい リミヨ

おばあちゃんとヒバクの島』（島田興生・写真 羽生田有紀・文）の英語版「Longing for My Home Island」（児玉克哉訳）が完成しました。昨春英語版出版が提案され、今年のビキニデーでは見本版を主人公のリミヨ・エボンさん、トニー・デブルム元外相、ヒルダ・ハイネ新大統領らにも見てもらい校正を重ねました。日本では賛同者より寄付を募り完成にこぎつけたものです。子どもの未来社より1500円+税。展示館ショップでも購入することができます。

**太平洋核実験 70 年シンポ**

7月24日明治学院大学国際会議場で「太平洋核実験70年 クロスローズ作戦再考」と題したシンポジウムが開催されました（グローバルヒバクシャ研究会等主催）。昨年『マーシャル諸島 終わりなき核被害を生きる』を上梓した竹峰誠一郎さん（明星大学）の基調報告の後、日本の南洋群島統治と核実験をテーマにジャーナリストの前田哲男さん、高橋博子さん（名古屋大学）、石原俊さん（明治学院大学）がコメントし、「戦後」切り離された南洋群島へのまなざしと、沖縄や硫黄島、小笠原列島をも視野にいれた議論がされました。後半は「核と太平洋をめぐる過去と現在」と題して豊崎博光さん（フォト・ジャーナリスト）、中原聖乃さん（中京大学）、第五福竜丸展示館市田真理学芸員からコメントが出され、広範にわたる核被害の実態が紹介され、真下俊樹（埼玉大学）さんから仏領ポリネシアにおけるフランス核実験被害について、ジャーナリストの藍原寛子さんからは福島における線引きと分断、避難と帰還についての特別報告がありました。

**忘れても地球は忘れぬ  
核実けん**

開館40年にあたり「展示館に初めてきたときの記憶」を募り、来館者アンケートなどと共に掲示しています。これを見た人がさらにメッセージを書いていくボードを設置しました。「第五福竜丸が幸福の竜となって天に昇る日がおとずれますように」「世界のみんが笑顔になれる日を！」「私たちは忘れない」「忘れても地球は忘れぬ核実けん」と思い思いの言葉が並んでいます。



**ご来館にあたってのご注意**

2020年の東京オリンピック・パラリンピック準備のための夢の島公園内での工事がこの秋から始まります。10月以降、第一駐車場（南側）から展示館への通路の一部が通行止めとなります。詳しくは展示館までお問合せください。

**久保山忌の諸行事は9月22日と23日**

第五福竜丸無線長久保山愛吉さんのご命日9月23日には、さまざまなグループが展示館につどい催しをおこないます。

例年9月23日は「秋分の日」で休日ですが、今年は暦の関係で休日は22日となっています。久保山忌の行事も22日と23日におこなわれます。ご注意ください。

**【22日の行事】**

- ◇平和を語る第五福竜丸の集い
  - ・午前10時30分より午後3時 展示館内
  - ・朗読、紙芝居、演芸、演奏語りなど、第五福竜丸ボランティアの会も出演します。
- ◇久保山忌句会
  - ・午前10時 展示館まえ久保山記念碑に献花、吟行。午後1時30分よりスポーツ文化館研修室Cにて句会。ミニ講演・山村茂雄（第五福竜丸平和協会顧問）

**◇築地にマグロ塚を作る会**

- ・午後1時30分より、夢の島マリナー2階会議室～マグロ塚の築地設置に関する署名のとりのくみ、都との折衝など今後の取組を意見交換、大石又七さん参加予定。

**【23日の行事】**

- ◇東京原水協
  - 第30回第五福竜丸のつどい
  - ・展示館見学、午後1時より献花式
  - ・午後1時50分～4時 スポーツ文化館マルチホール 講演会 青木佳子（保存運動）、柴田桂馬（エンジンの運動より）